

第59図 SD 1

形態的な特徴から、土壙墓の可能性があり、埋没後に掘り込まれたものと考えられる。

3 流路

SD 1 (第59～64図、PL. 28～30・49～52・59・60)

1区東側調査区際のB2、C2、D2、E2、F2グリッドにあり、標高34.2～34.9 m付近の平坦面に立地する。造成土除去後の1-V・VI層上面で検出した。C2グリッドでは、縄文時代の竪穴住居跡SI4を掘削している。

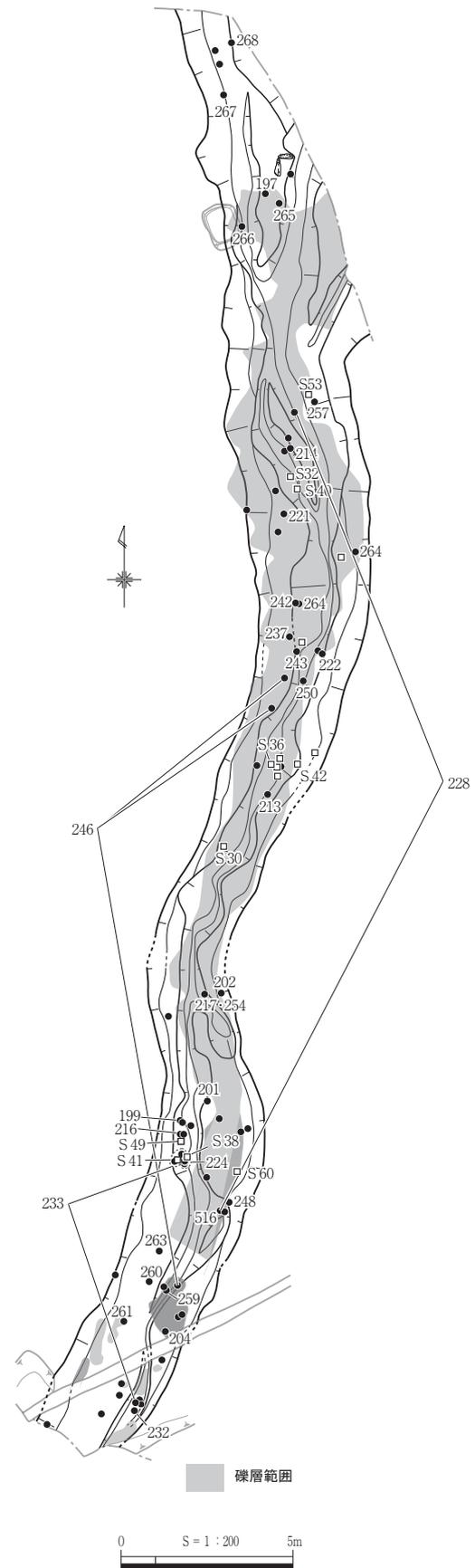
方向は、概ねN-12°-Eと南南西から北北東に向かって蛇行しながら延びる。長さ42.16 m以上、幅2.01～3.88 mを測り、南側、北側とも調査区外へ延びる。断面は不整形な皿状ないし逆台形状を呈し、深さ0.12～0.68 mを測る。底面の標高は、南側が標高34.8 m、北側が34.0 mとなり、南から北側に向かって傾斜している。底面は平坦ではなく凹凸が見られ、幾筋もの流れがあったものと考えられる。

埋土は、17層に分層できた。底面付近から上層にかけて砂礫から人頭大の礫を多量に含む黒褐色土系の埋土が堆積している。特に、埋土上層からは人頭大の安山岩礫層が堆積しており、おそらく遺跡東側を流れる下市川の氾濫時に、埋りきったものと考えられる。

遺物は、埋土中から多量の縄文土器、弥生土器、サヌカイト製石鏃、石匙などが出土した。

図化したものは、縄文土器では五明田式併行期(中津・福田KⅡ式土器様式第3様式古段階)の有文精製深鉢189～196、有文精製浅鉢197、注口土器202がある。布勢式併行期(中津・福田KⅡ式土器様式第4段階)のものでは、有文精製深鉢198～201がある。突帯文系土器様式期では、無文粗製深鉢203・204、無文精製浅鉢205、補修孔をもつ粗製深鉢206・207、突帯文をもつ深鉢208～211、尖り気味の小さな平底をもつ212がある。

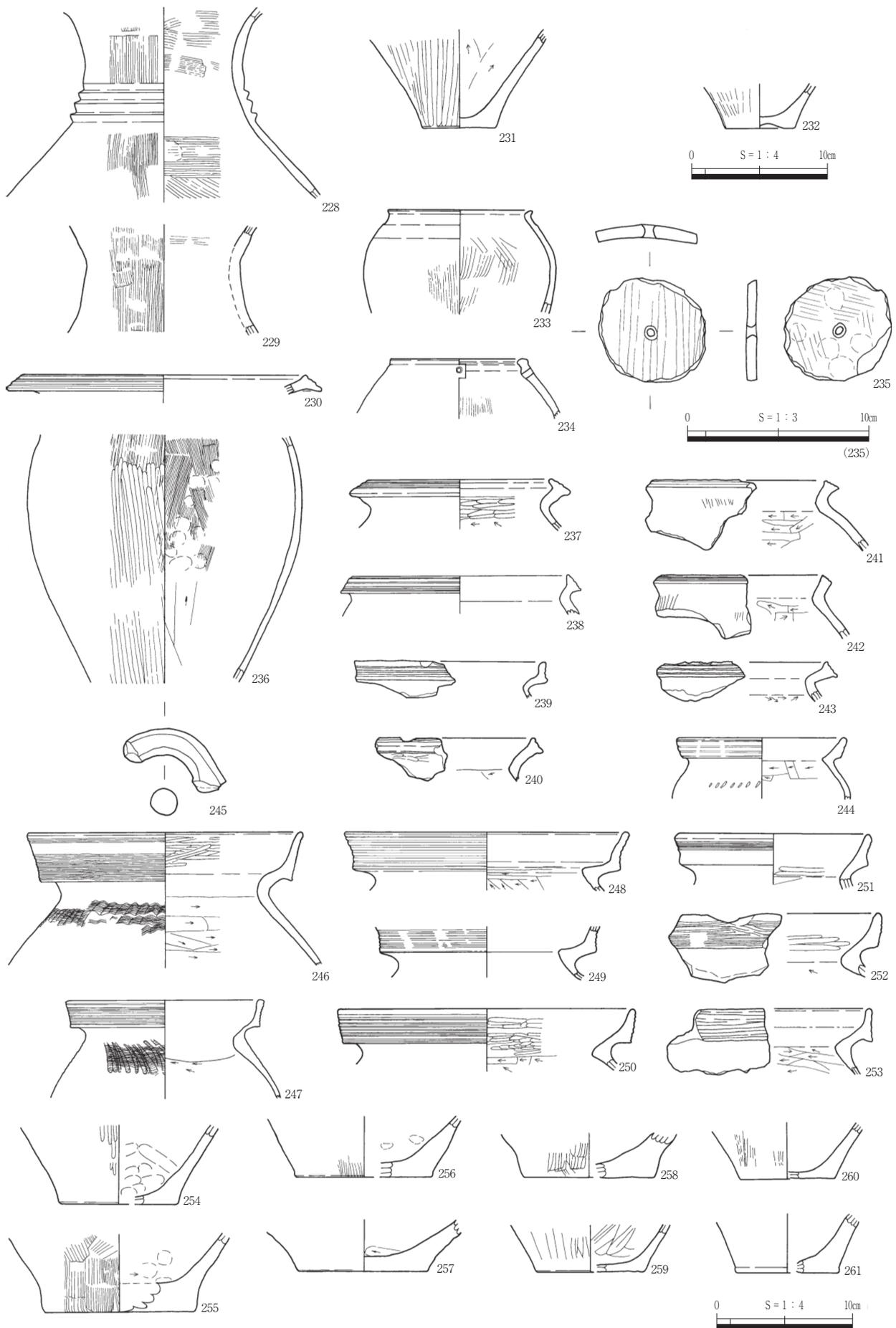
弥生土器では、清水編年Ⅰ-2様式の甕213、Ⅱ-1様式の甕214～216、前期の底部217、Ⅲ-3様式の甕218～220、Ⅳ-1様式の甕221～224、Ⅳ-2・3様式の甕225～227、壺228～230、底部231・232、無頸壺233・234、土器片転用紡錘車235、甕体部片236、Ⅴ-1様式の甕237～243、Ⅴ-2様式の甕244、把手245、Ⅴ-3様式の甕246～253、高坏262、後期と考



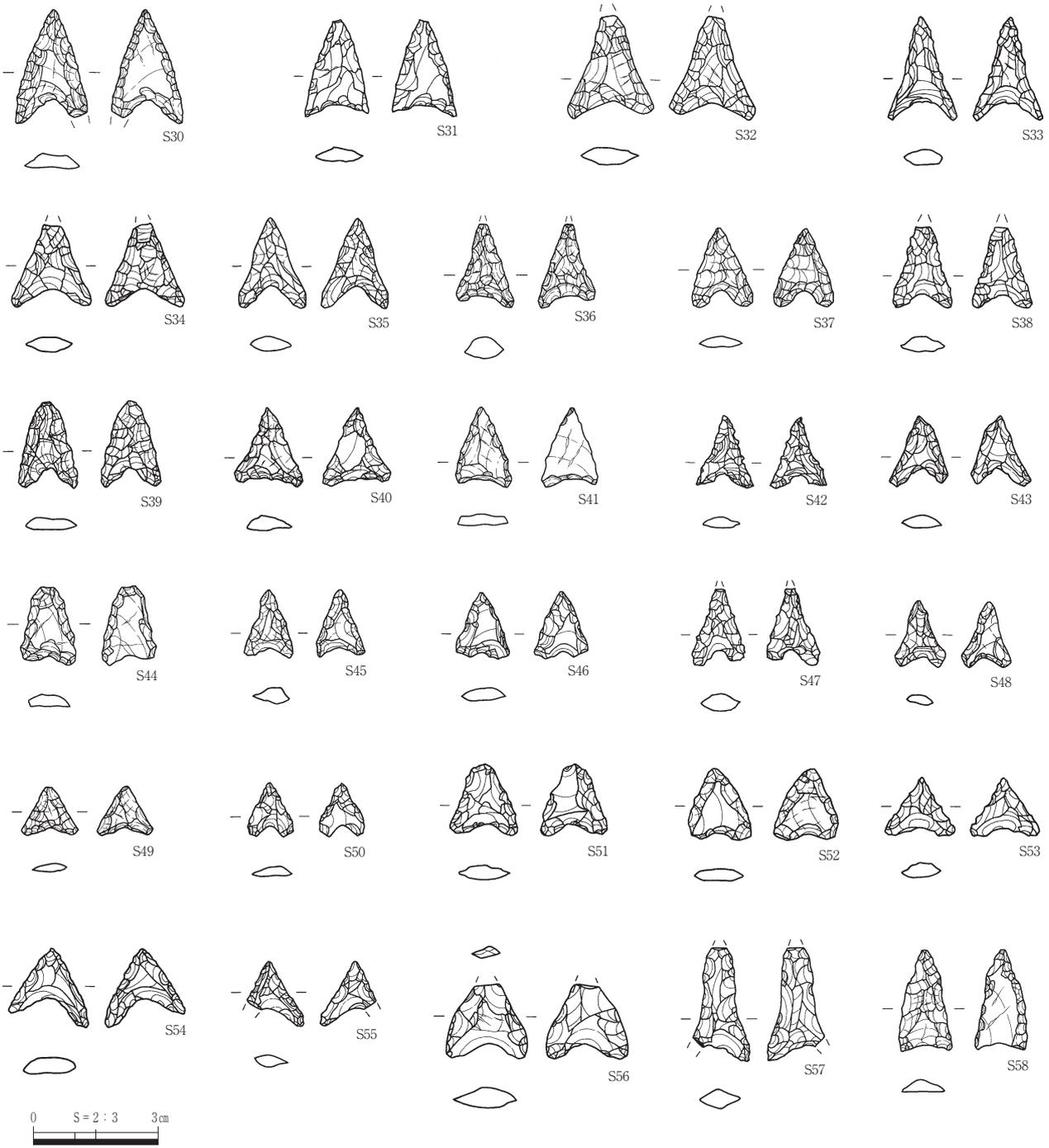
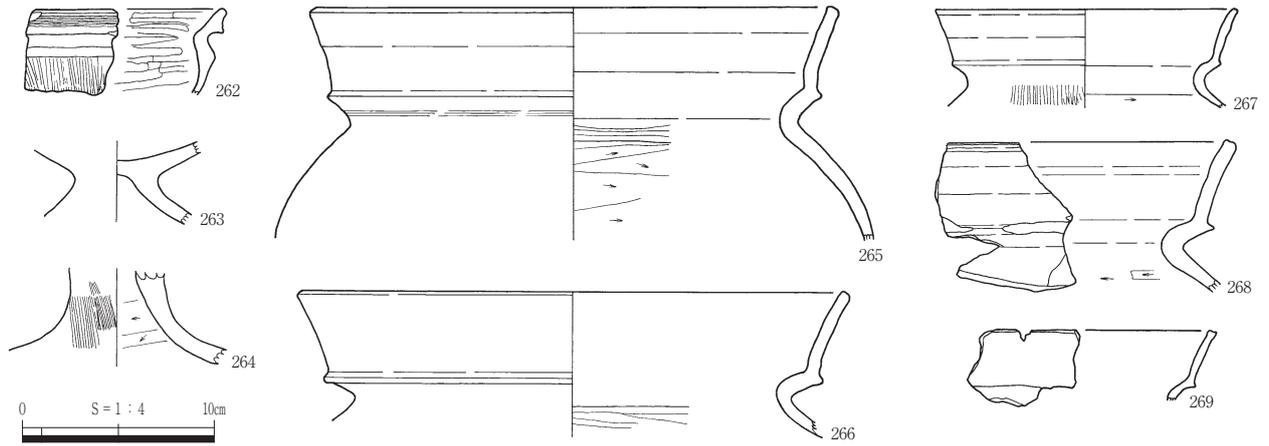
第60図 SD 1 礫・遺物出土状況



第61図 SD1出土遺物(1)

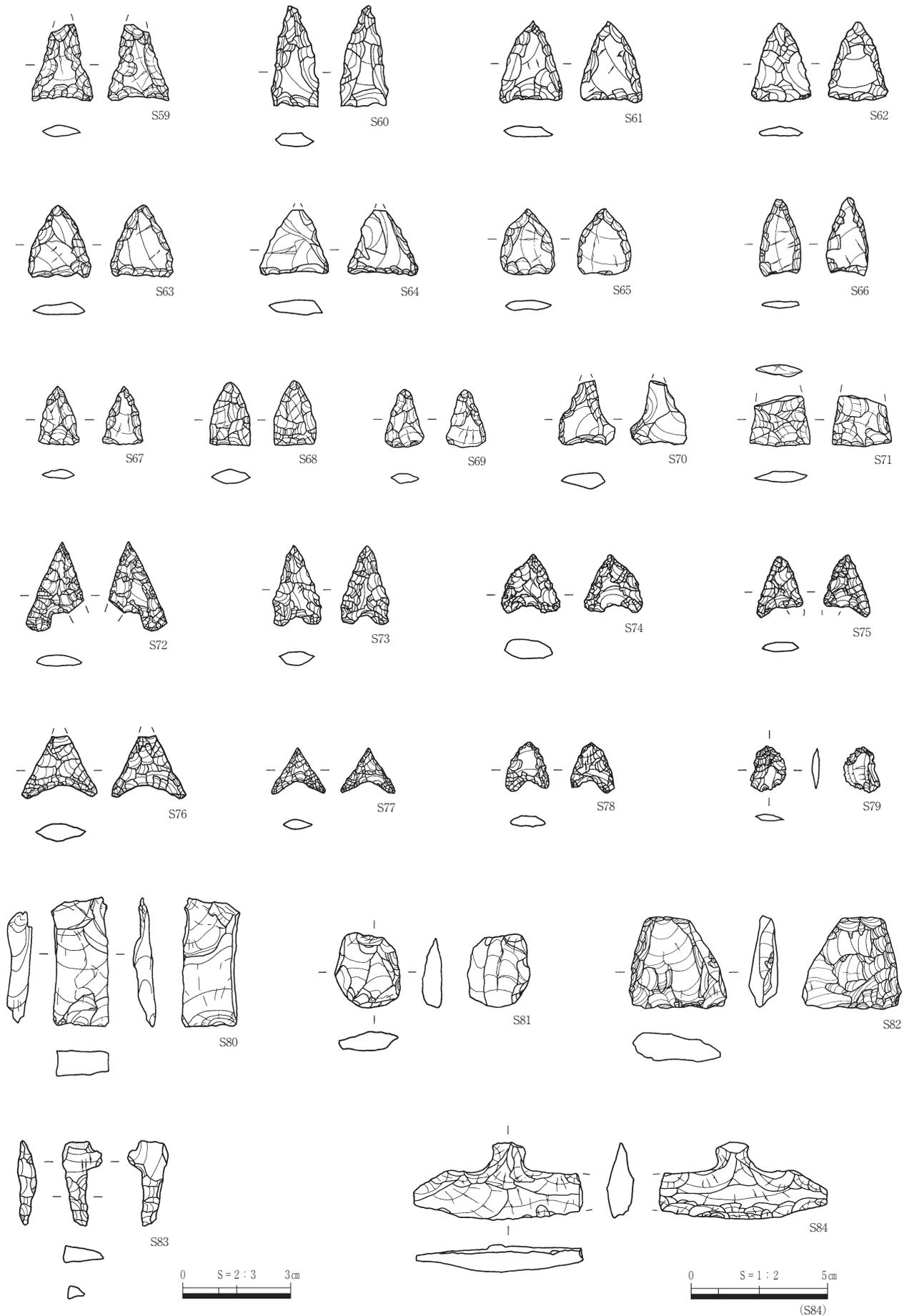


第62図 SD 1 出土遺物(2)



第63図 SD 1 出土遺物(3)

第3章 1区の調査成果



第64図 SD1 出土遺物(4)

られる甕底部 254～261、清水編年Ⅵ-1 様式の低脚坏 263、高坏 264 がある。

このうち、228・233・246 はかなり離れた位置のもの同士が接合しており、おそらく水流によって離れたものと考えられる。

土師器では、検出段階で出土した、天神川編年Ⅰ期の甕 265～269 を図化した。

その他、剥片石器が多量に出土した。サヌカイト製石鏃 S 30～S 68、サヌカイト製石鏃未成品 S 69・70、黒曜石製石鏃 S 71～S 78、黒曜石製石鏃未成品 S 79、サヌカイト製楔形石器 S 80・81、黒曜石製楔形石器 S 82・83、サヌカイト製石匙 S 84 がある。サヌカイト製石鏃のうち、S 30～S 58 は凹基無茎石鏃で、大型から小型、抉りの深いものから浅いものまでバラエティに富む。S 59～S 68 は、平基無茎石鏃で、幅広のもの、細長のものまでである。S 69・70 はサヌカイト製石鏃未成品である。黒曜石製石鏃はすべて凹基無茎石鏃である。S 79 は未成品である。

これら出土遺物のうち、縄文土器や弥生時代前期から中期の土器は、磨耗が著しいものが多く、上流から流されたものと考えられる。弥生時代後期の土器は、埋土下層の砂礫層から出土したものが多く、磨耗が明瞭ではなく、堆積時期に近いものと考えられる。なお、検出段階で出土した土師器は、調査時では確認できなかったが、後述する SD 2 に伴う可能性があり、後に混入したものと考えられる。

出土遺物から、清水編年Ⅴ-3 様式、弥生時代後期後葉ごろに埋没したものと考えられる。石器の大半のものは縄文時代に帰属するものと考えられ、周辺の包含層遺物が堆積時に混入したものと考えられる。

SD 1 は、地形に沿って延びており、大量の礫によって埋まっていることから、下市川が上流部で氾濫した際に形成された河川の支流であったと考える。



文中写真6 1区重機表土剥ぎ風景(1)



文中写真7 1区重機表土剥ぎ風景(2)

第5節 古墳時代の調査成果

1 概要 (第65図)

古墳時代において、1区では、わずかに溝1基 (SD 2) を検出した。

1区で出土したこの時代の遺物は、古墳時代前期と後期のものに限られており、遺跡の東側周辺では、この時期に当該期の集落が営まれていた可能性がある。なお、2区では後期の須恵器も出土しており、集落域が西側へも拡大した可能性がある。

2 溝

SD 2 (第66～68図、PL. 30・53・61)

1区中央やや南側のD 3・4・5、E 5・6グリッドにあり、標高34.1～35.0 m付近の平坦面に立地する。造成土除去後の1～VI層上面で検出した。上半部は圃場整備の際に掘削されており、底面部分のみを検出した。北側肩部は、圃場整備に伴う暗渠によって一部壊されている。

方向は、N - 62° - Eと西南西から東北東に向かってほぼ直線的に延びる。長さ39.24 m以上、幅1.26～2.11 mを測る。断面は不整形なボウル状を呈し、深さ0.06～0.4 mを測る。

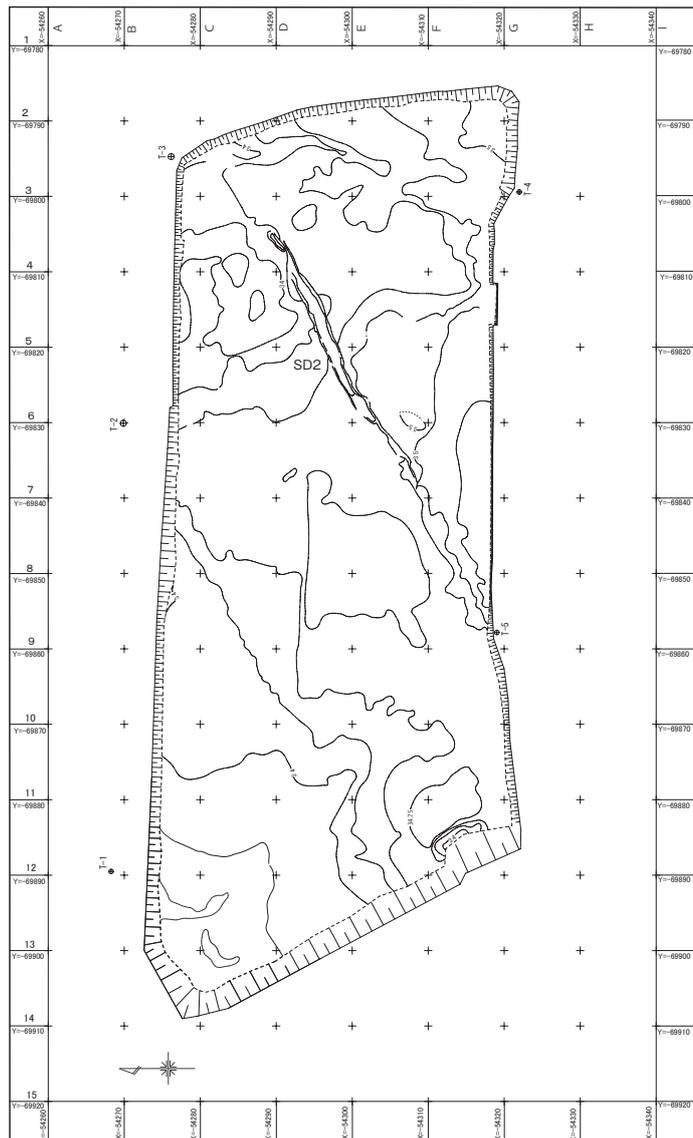
底面は平坦ではなく凹凸がみられるが、底面の標高は、西側が標高34.8 m、東側が33.9 mとなり、概ね西側から東側に向かって傾斜している。

埋土は、4層に分層できた。底面付近では砂礫を含むシルト質土が堆積し、上層は砂礫から人頭大の礫を多量に含む灰黄褐色砂礫土が堆積している。いずれも砂礫を含むことから、ある程度の流水があったものと考えられる。

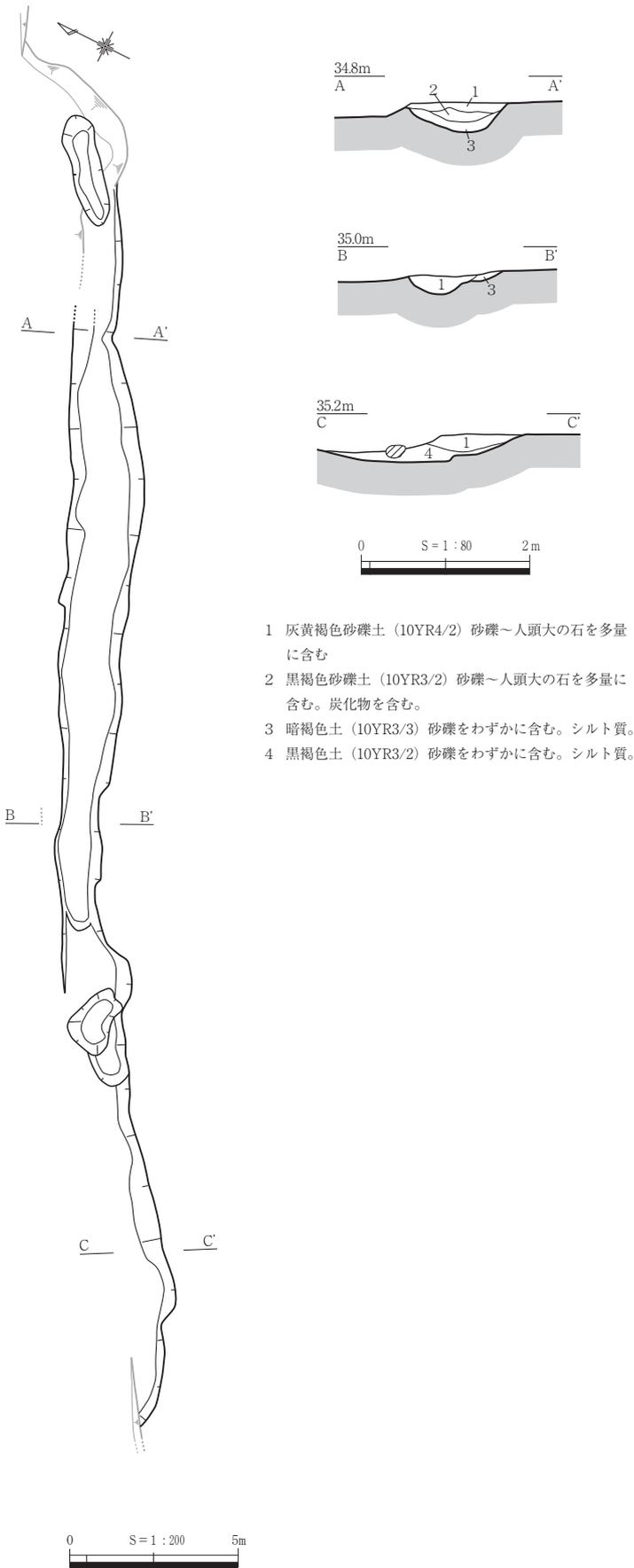
遺物は、埋土上層から出土した270～282を図化した。出土遺物には縄文土器から土師器までであるが、本遺構に伴うものは古墳時代の土師器で、その他は混入したものと考えられる。

遺構に伴うものとして、270がある。古墳時代前期の土師器甕で、シャープなつくりで倒卵形を呈す体部をもつものと考えられる。

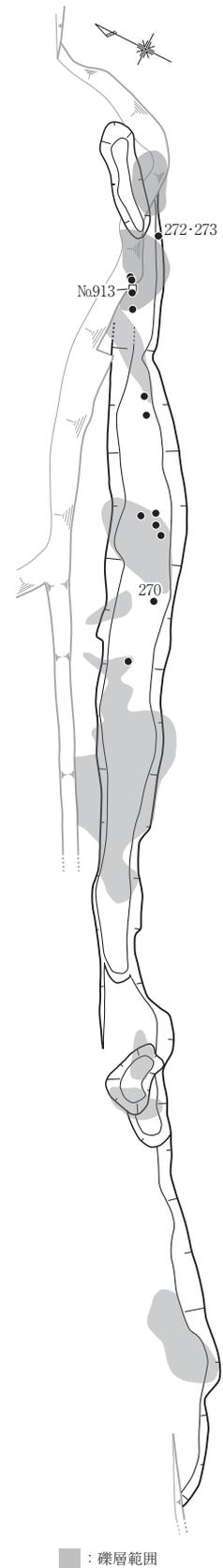
以下は、混入遺物である。271～282は縄文土器である。271は五明田式併行期 (中津・福田 K II 式土器様式第3様式古段階) の精製深鉢で、2条沈線に充填縄文が施されるものである。272～280は縄文時代晩期の突帯文土器である。刻み目が施される貼り付け突帯をもち口縁端部に刻み目をもつ



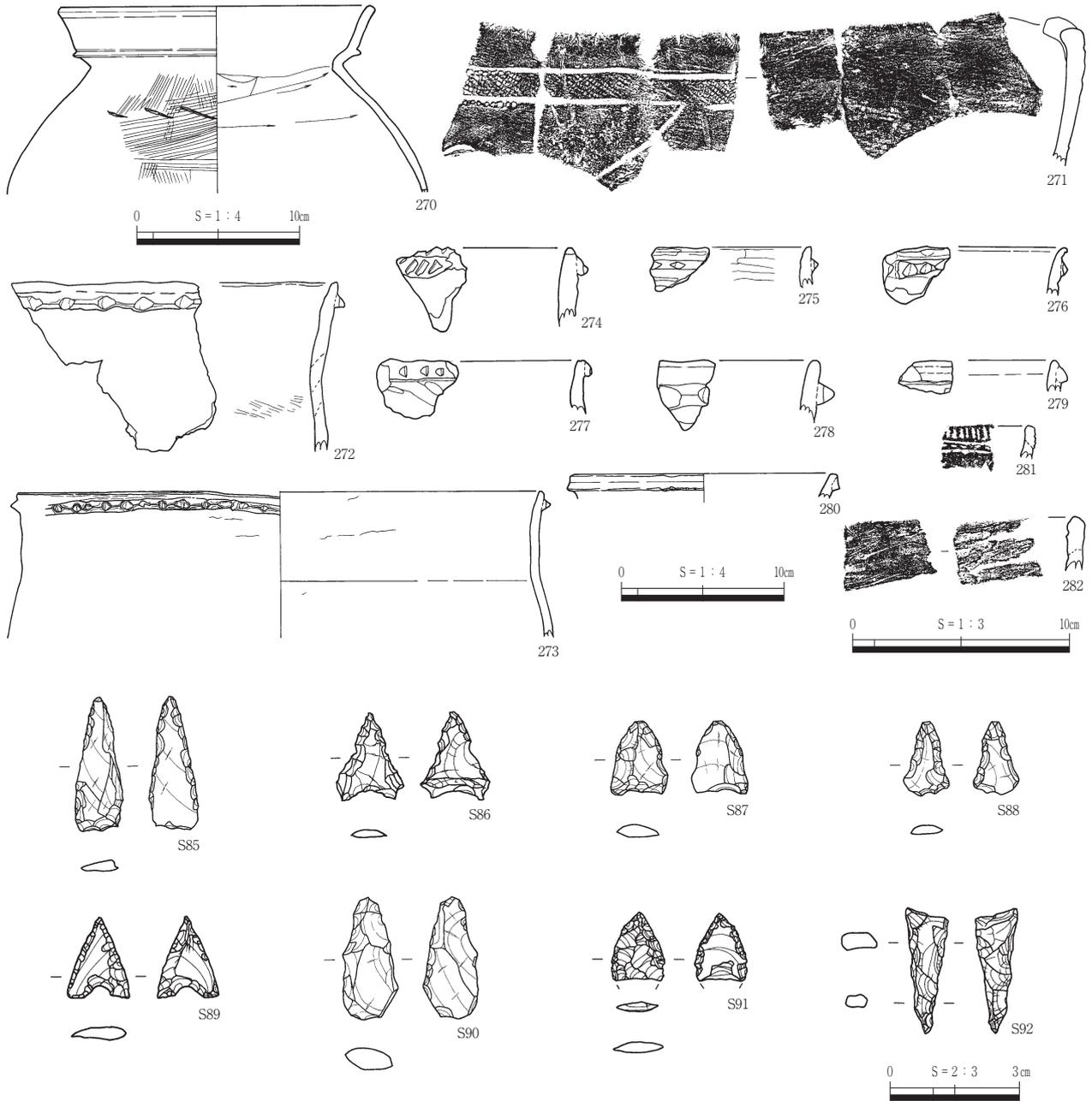
第65図 1区古墳時代遺構配置図



第66図 SD2



第67図 SD2 礫・遺物出土状況



第68図 SD2出土遺物

274、口縁端部に刻み目をもたない272・273・275～277、刻み目が施されない貼り付け突帯をもつ278～280がある。281は爪形の刺突文が施されるもので、縄文時代前期の可能性がある。282は口縁内面に凹線が施されるもので、縄文時代晩期の粗製深鉢片である。その他、図化した石器には、サヌカイト製石鏃S85～S88、黒曜石製石鏃S89、石鏃未成品S90・91、サヌカイト製石錐S92がある。

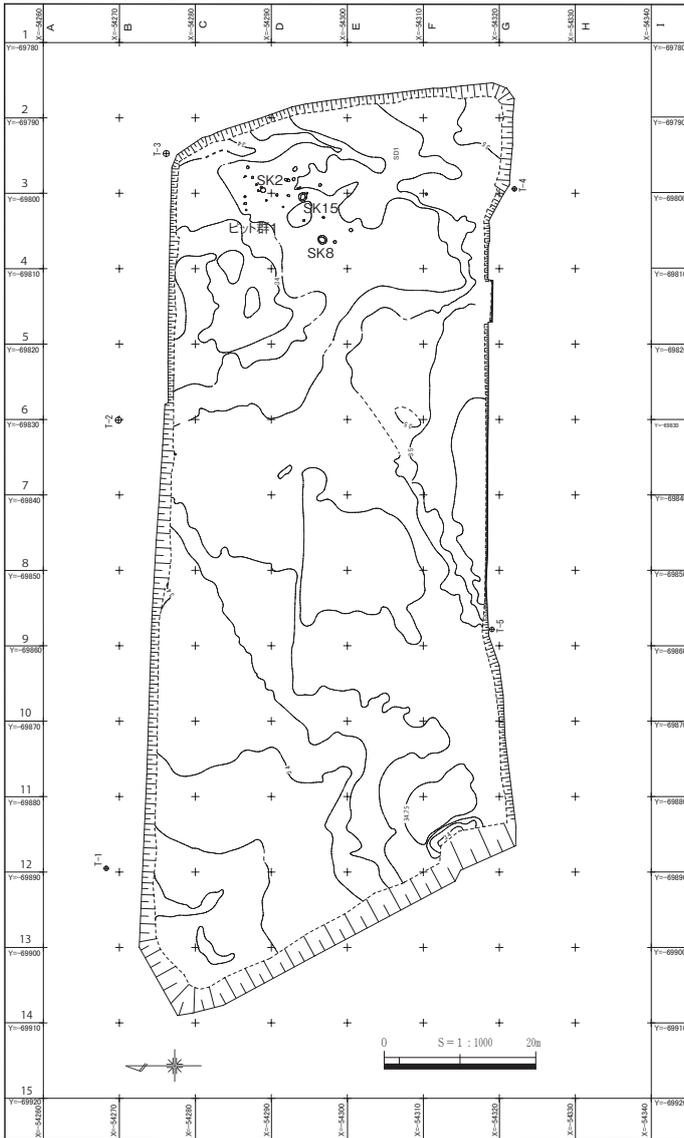
出土遺物から、天神川I期、古墳時代前期初頭ごろのものと考えられる。

明確に人為的に掘り込まれたとは言い難いが、等高線に沿って直線的に延びるような形態であることから、自然河川ではなく、意図的に掘り込まれた溝と考える。この溝は、埋土に砂礫を含むことから、ある程度の流水があったものと考えられる。

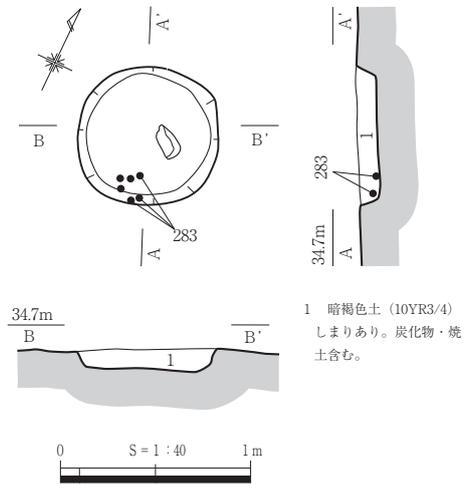
第6節 中世の調査成果

1 概要(第69図)

当遺跡では、中世の遺構もわずかではあるが検出することができた。1区ではわずかに土坑3基(SK 2・8・15)、ピット群1箇所を検出した。検出箇所は1区北東側のみで、検出層位は1-1-IV層から1-VI層上面である。1-VI層上面で検出したものについても、本来は1-IV層中から掘り込まれたものと考える。



第69図 1区中世遺構配置図



第70図 SK 2

2 土坑

SK 2 (第70図、PL. 31・53)

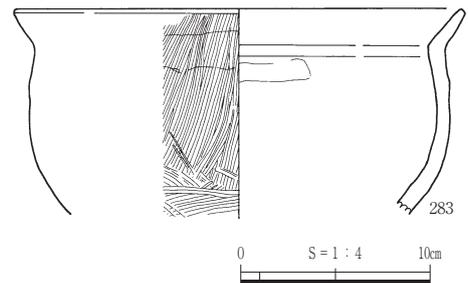
1区北東側のC 2グリッドにあり、標高 34.6 m付近の平坦面に立地する。造成土及び旧耕作土を除去した後の1-IV層上面で検出した。南側約 4 mにはSK15がある。

平面形は円形を呈し、長軸 0.84 m、短軸 0.82 mを測る。断面は浅い皿状を呈し、深さ最大 0.12 mを測る。底面は1-IV層中で収まり、円形を呈し、長軸 0.65 m、短軸 0.63 mを測る。ほぼ平坦である。

埋土は、炭化物や焼土を含む暗褐色土単層が入る。よく締まった埋土で、検出面ではやや盛り上がるように検出されたことから、本来はやや高い位置から掘り込まれたものと考えられる。

遺物は、埋土中から土師質土器鍋 283 が出土した。

出土遺物から、八峠編年中世II期、12世紀から13世紀ご



第71図 SK 2 出土遺物

第3章 1区の調査成果

ろのものと考えられる。性格は不明である。

SK 8 (第72図、PL.31)

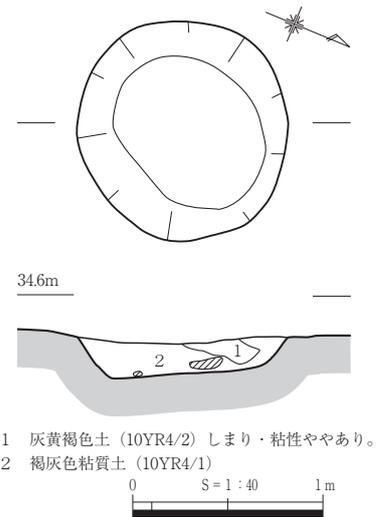
1区北東側のD 3グリッドにあり、標高 34.3 m 付近の平坦面に立地する。1 - V層を除去した後の1 - VI層上面で検出したが、本来は1 - IV層から掘り込まれたものとする。東側約5 mにはSK15がある。

平面形は円形を呈し、長軸 1.16 m、短軸 1.1 mを測る。断面は浅い皿状を呈し、深さ最大 0.14 mを測る。底面は1 - VI層中に収まり楕円形を呈し、長軸 0.87 m、短軸 0.68 mを測り、ほぼ平坦である。

埋土は、ブロック状に入る灰黄褐色土と褐灰色粘質土の2層に分層できた。

遺物は、埋土中から土師質土器皿片が出土した。底部は回転糸切痕を残すものであるが、小片のため図化できなかった。

詳細な時期は不明であるが、中世ごろのものと考えられる。性格は不明である。



第72図 SK 8

SK15 (第73図、PL.31)

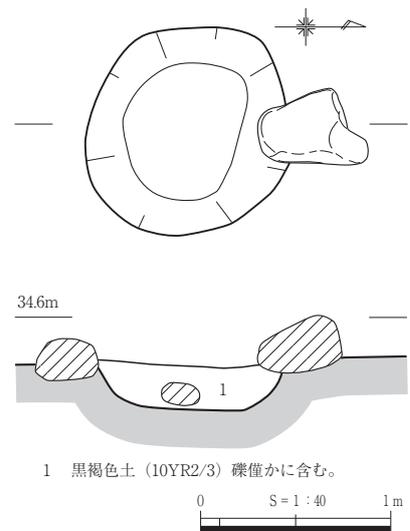
1区北東側のD 3グリッドにあり、標高 34.3 m 付近の平坦面に立地する。1 - V層を除去した後の1 - VI層上面で検出したが、本来は、1 - IV層から掘り込まれたものとする。西側約5 mには、SK 8がある。

平面形はほぼ円形を呈し、長軸 1.15 m、短軸 1.06 mを測る。断面はボウル状を呈し、深さ最大 0.22 mを測る。底面はVI層中に収まり楕円形を呈し、長軸 0.87 m、短軸 0.68 mを測り、ほぼ平坦である。

埋土は、礫をわずかに含む黒褐色土が単層で入る。

遺物は、埋土中から縄文土器片が出土しているが、混入したものとする。

詳細な時期は不明であるが、形態的に中世と考えられるSK 8に類似することから、中世ごろのものと考えられる。性格は不明である。



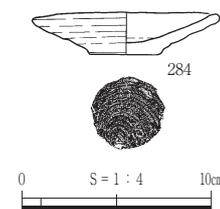
第73図 SK15

3 ピット群

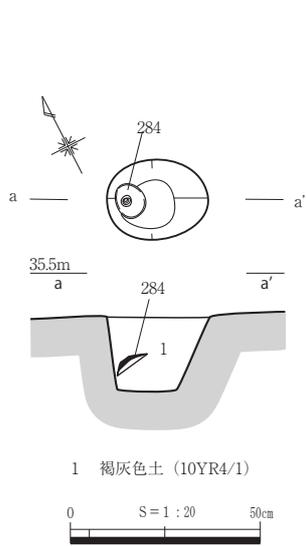
ピット群1 (第74・75図、表8、PL. 32・53)

1区北東側のC 2・3、D 2・3グリッドにあり、標高 34.3 ~ 34.8 mのほぼ平坦面に立地する。この範囲には、中世の土坑SK 2・15・16がある。

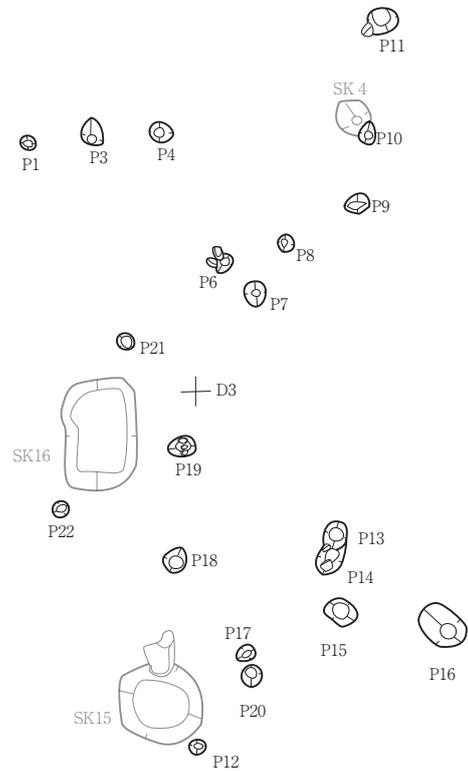
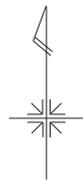
25基からなるものであるが、配列に規則性はなく、建物等に



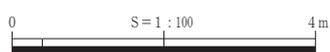
第74図 ピット群1P4出土遺物



P4 遺物出土状況図



第75図 ピット群1



+ F3

⊙ P23

第3章 1区の調査成果

なるものではないと考える。ピットの深さは一律ではなく、6～35cmと幅がある。1－V層掘り下げ中に検出したものが多いが、本来は1－IV層から掘り込まれたものと考えられ、さらに深かったものと思われる。

埋土は、黒褐色から褐灰色で、炭化物を含むものがある（P1・3・6・13・17・19）。柱痕跡を確認できるものはない。

P4・11・16で土器が出土しているが、P4出土の土師質土器小皿284以外は、小片のため図化することはできなかった。284は、小さな回転糸切り底をもち、体部には強い轆轤目をもつ。

ピット群1の時期は、詳細は不明であるが、埋土が褐灰色のP4から出土した小皿284は、八峠編年中世VI期、16世紀ごろと考えられる。黒褐色の埋土となるピットについては、異なる時期の可能性もあるが、おおむね中世に帰属するものとする。



文中写真8 1区SI2作業風景（北から）



文中写真9 1区作業風景（南から）

表8 ピット群1ピット一覧表

ピット番号	規模（長軸×短軸－深さ）cm	備考	ピット番号	規模（長軸×短軸－深さ）cm	備考
P1	21×20－26	褐灰色土（10YR4/1 炭化物わずかに含む）	P14	63×34－17	黒褐色土（10YR4/1）
P2	32×28－42	褐灰色土（10YR4/1）	P15	43×33－13	黒褐色土（10YR4/1）
P3	35×28－21	黒褐色土（10YR3/1 炭化物わずかに含む）	P16	65×47－13	黒褐色土（10YR4/1 土器含む）
P4	29×23－21	褐灰色土（10YR4/1 土師質土器出土）	P17	26×19－11	褐灰色土（10YR3/1 炭化物わずかに含む）
P5	39×34－15	褐灰色土（10YR4/1）	P18	35×29－16	黒褐色土（10YR3/2）
P6	27×20－12	褐灰色土（10YR4/1 炭化物わずかに含む）	P19	36×28－13	褐灰色土（10YR3/1 炭化物わずかに含む）
P7	34×27－29	褐灰色土（10YR3/1）	P20	28×26－15	黒褐色土（10YR3/2）
P8	23×23－13	黒褐色土（10YR4/1）	P21	23×20－27	褐灰色土（10YR4/1）
P9	32×26－6	黒褐色土（10YR3/2）	P22	22×21－14	褐灰色土（10YR4/1）
P10	29×20－14	褐灰色土（10YR4/1）	P23	29×27－20	褐灰色土（10YR4/1 炭化物多量に含む）
P11	39×32－35	黒褐色土（10YR3/1 土器含む）	P24	37×34－17	黒褐色土（10YR3/2）
P12	21×20－15	黒褐色土（10YR3/2）	P25	49×34－34	黒褐色土（10YR3/2）
P13	38×32－35	褐灰色土（10YR3/1 炭化物わずかに含む）			

第7節 時期不明の遺構

1 概要 (第76図)

その他、1区時期不明の遺構には、SK 3、ピット群2、ピット群3がある。

2 土坑

SK 3 (第77図、PL. 32)

1区中央から北寄りのC 6グリッド、標高 34.7 mの平坦面に立地する。周辺には、北側1～8 mの範囲にピット群2、西約5 mにSK10、北東約5 mにSK 7がある。表土及び耕作土を除去した後の、1～VI層上面で検出した。

平面形は、長辺 0.78 m、短辺 0.70 mのほぼ円形で、検出面からの深さは 0.15 mである。本遺構が位置する地点の地形はほぼ平坦であるが、これは圃場整備による掘削により削平されたためと考えられ、本遺構の深さは、さらに深かったと考えられる。

埋土は、灰黄褐色土単層である。堆積状況から自然堆積したものと推定する。

遺物の出土はなく、性格を決定づける形態的な特徴等も見出せないことから、本遺構の性格、帰属時期ともに不明である。

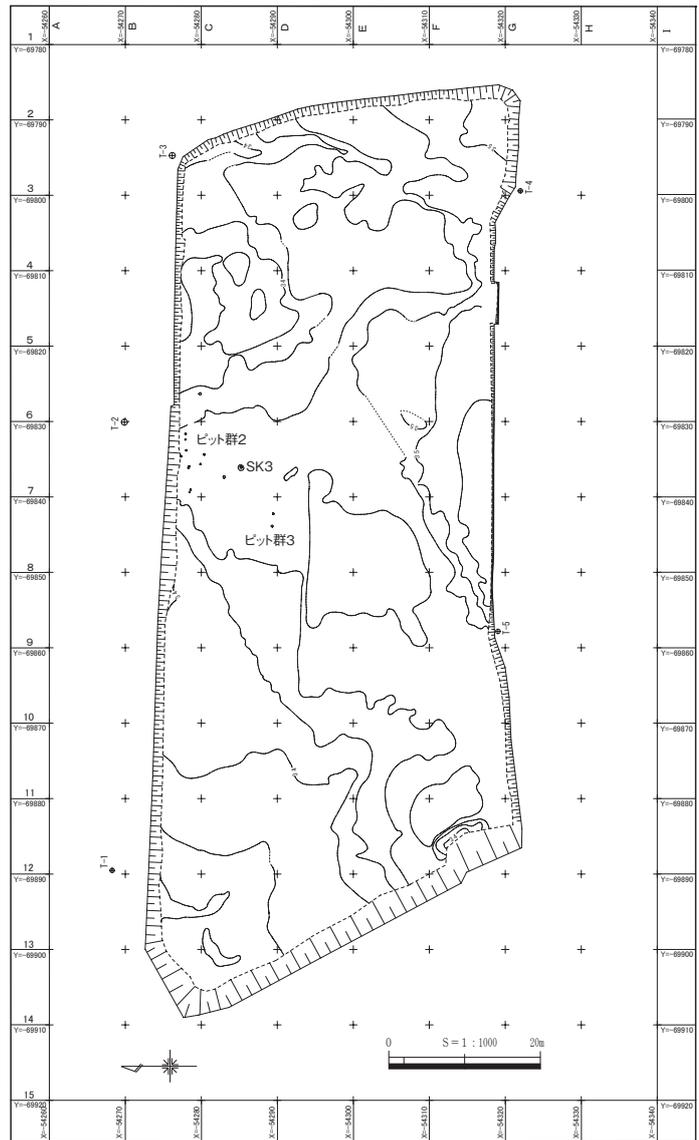
3 ピット群

ピット群2 (第78図、表9)

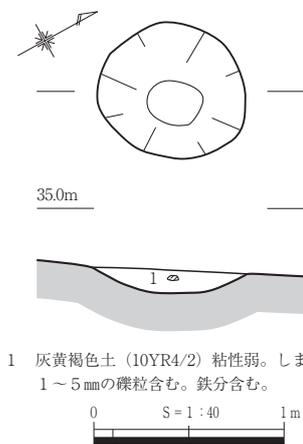
1区中央北側調査区際のB・C 6グリッドにあり、標高 34.5 mの平坦面に立地する。表土及び耕作土を除去した後の、1～VI層上面において検出した。

12基のピットからなるもので、建物になるような配列は確認できなかった。ピットの深さはまちまちで、最も深いP 5が32cm、最も浅いP 9が8cmである。このピット群が位置する地点の地形はほぼ平坦だが、これは圃場整備による掘削により削平されたためと考えられ、本来は、いずれのピットもさらに深かったと考えられる。

埋土は、P 12が褐灰色土、そのほかのものはすべて暗褐色土である。埋土に炭化物の混じるピットがいくつかあるが、柱痕跡を確

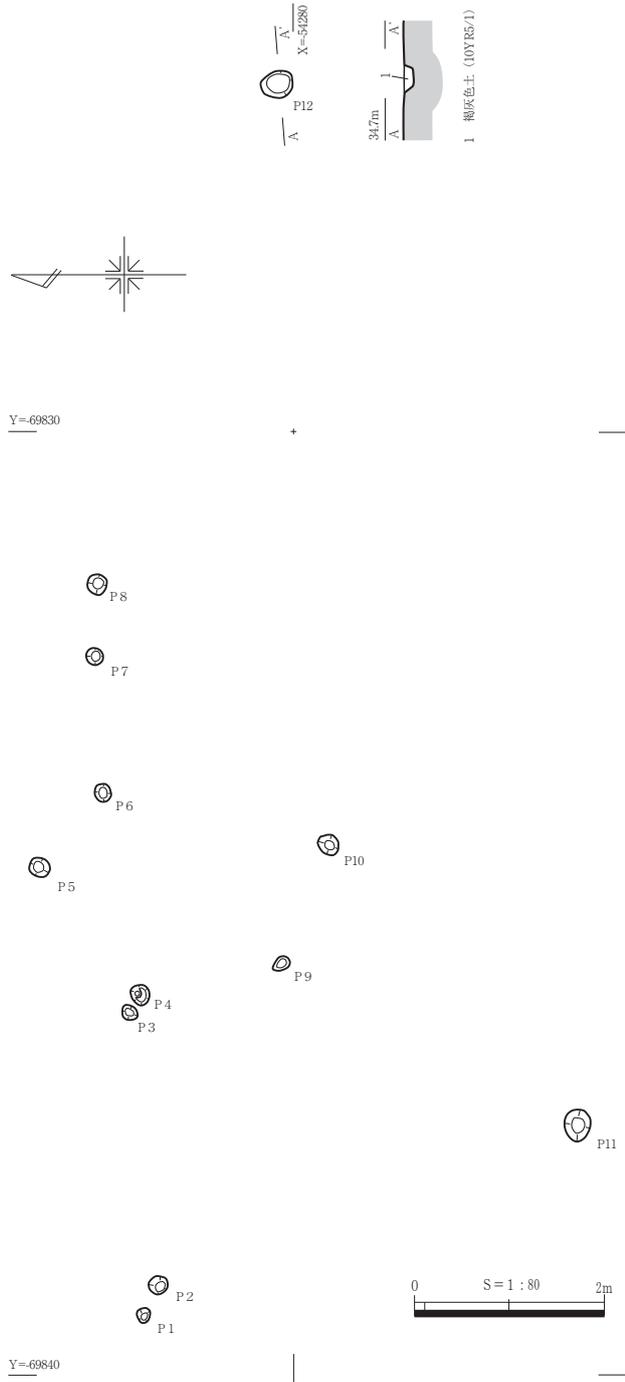


第76図 1区時期不明遺構配置図

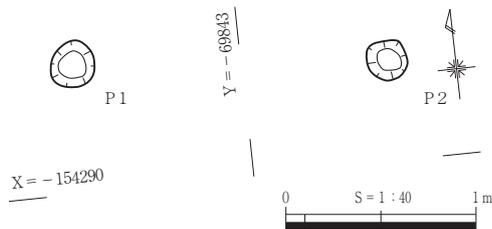


1 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性弱。しまり強。
1～5mmの礫粒含む。鉄分含む。

第77図 SK 3



第78図 ピット群2



第79図 ピット群3

表9 ピット群2ピット一覧表

ピット番号	規模 (長軸×短軸-深さ) cm	備考
P 1	17×14-10	暗褐色土 (10YR3/3)
P 2	20×19-10	暗褐色土 (10YR3/3 炭化物わずかに含む)
P 3	19×15-16	暗褐色土 (10YR3/3 炭化物わずかに含む)
P 4	23×20-22	暗褐色土 (10YR3/3 炭化物わずかに含む)
P 5	23×20-32	暗褐色土 (10YR3/3 炭化物わずかに含む)
P 6	20×17-12	暗褐色土 (10YR3/3 炭化物わずかに含む)
P 7	19×17-26	暗褐色土 (10YR3/3 炭化物わずかに含む)
P 8	21×21-16	暗褐色土 (10YR3/3)
P 9	20×13-8	暗褐色土 (10YR3/3)
P 10	24×20-25	暗褐色土 (10YR3/3)
P 11	35×26-15	暗褐色土 (10YR3/3)
P 12	35×29-15	暗褐色土 (10YR3/3)

認できるものはない。

遺物が出土しているピットはなく、時期、性格ともに不明である。

ピット群3 (第79図、表10)

1区中央北側のC7グリッドにあり、標高346m付近の平坦面に立地する。ピットはすべて表土・耕作土直下の黄褐色土(1-VI層)中において検出した。

2基のピットからなる。検出できたピットの数
が少なく、建物等となる配列は確認できなかった。
ピットの深さは、P1が7cm、P2が11cmと大
変浅い。ピット群2と同様、後世の土地改変によ
って削平を受けている可能性がある。

埋土はP1・2とも灰黄褐色土で、柱痕跡は
確認できない。

遺物が出土しているピットはなく、時期、性格
ともに不明である。

表10 ピット群3ピット一覧表

ピット番号	規模 (長軸×短軸-深さ) cm	備考
P 1	25×24-7	灰黄褐色土 (10YR4/2)
P 2	23×22-11	灰黄褐色土 (10YR4/2)

第8節 遺物包含層・遺構外出土遺物

1 遺物包含層出土遺物

1 - IV層出土遺物（第80～82図、PL. 54・55・61）

1 - IV層は、1区東側で検出された褐色から黒褐色の遺物包含層である（第1節参照）。純粹に縄文土器のみを包含する層（1 - V層）の上位に堆積し、土器を中心にして大量の遺物が出土し、概ね縄文時代から中世にかけての遺物を包含する。土層断面では数層に分層できたが、平面的には識別が困難で、出土遺物も、1 - V層のものと同時に取り上げてしまったものもある。

図化したものは、縄文土器 285～334、弥生土器 335～340、土師器 土師質土器 341 である。

縄文土器のうち 285～287 は、山形の押型文をもつ深鉢で、285 は縦位の山形文が施される。これらは、黄島式と考えられ、縄文時代早期と考えられる。

288～291 は繊維土器で外面縄文が施されるものである。内面調整はナデのもの（289・291）、条痕のもの（288）、縄文が施されるもの（290）がある。菱根式に属するものと考えられる。

292 は、内外面条痕が施されるものである。293 は外面条痕地に一部縄文が施されるものである。294 は外面条痕地に列状に刺突文が施されるものである。西川津式A類に相当すると考えられ、縄文時代前期初頭ごろのものと考えられる。

295 は、外面撚糸文地に沈線が施されるもので、北白川C式併行期、縄文時代中期末ごろのものと考えられる。

296～307 は、五明田式併行期（中津・福田KⅡ式土器様式第3様式古段階）のものである。296～301 は有文精製深鉢、302～305 は有文精製浅鉢、306 は有文精製双耳壺、307 は有文精製壺である。

308～318 は、島式併行期（中津・福田KⅡ式土器様式第3様式新段階）のものである。有文精製深鉢には、磨消縄文が入らない2本沈線のみを施文のもの（309～316）、3本沈線による磨消縄文が施されるもの（317・318）がある。308 は、無文精製双耳壺である。

319～324 は、布勢式併行期（中津・福田KⅡ式土器様式第4様式）のものである。319 は有文精製深鉢で、頸部にも沈線による施文が施され、口縁帯と体部の施文が完全には分離されていない。体部には3～4本沈線による磨消縄文が施される。

325・326 は、西日本磨研土器様式のものである。内外面細かな磨きが施されるものである。

327～334 は、突帯文系土器様式のものである。327～332 は、口縁部に刻み目を施す貼り付け突帯をもつ深鉢で、口縁端部にも刻み目をもつもの（327～330）、刻み目をもたないもの（331・332）がある。333 は、粗製深鉢である。334 は、尖り底の粗製深鉢の底部である。

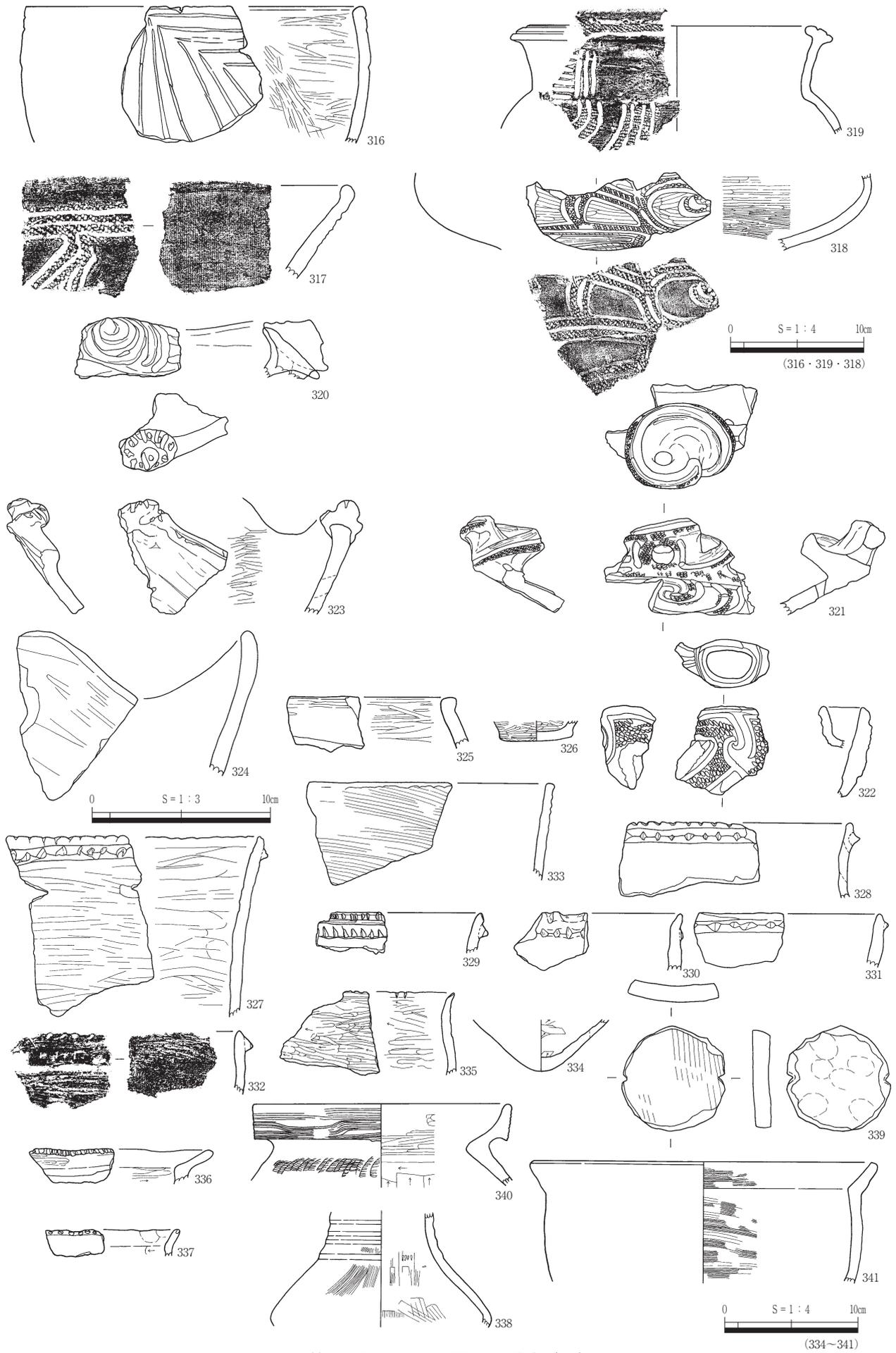
弥生土器は、前期から後期にかけてのものがみられる。335～337 は甕で、清水編年Ⅰ-2様式、弥生時代前期後半と考えられる。338 は、そろばん玉形の体部に直口をもつ脚坏壺で、弥生時代中期のものである。339 は中期甕又は壺の体部片を転用した土器片鉢で、両端に切れ込みをもつ。

340 は、清水編年Ⅴ-3様式、弥生時代後期後葉の甕である。口縁部に多条化した乱れた平行沈線、肩部に貝殻腹縁による押し引き沈線文が施される。

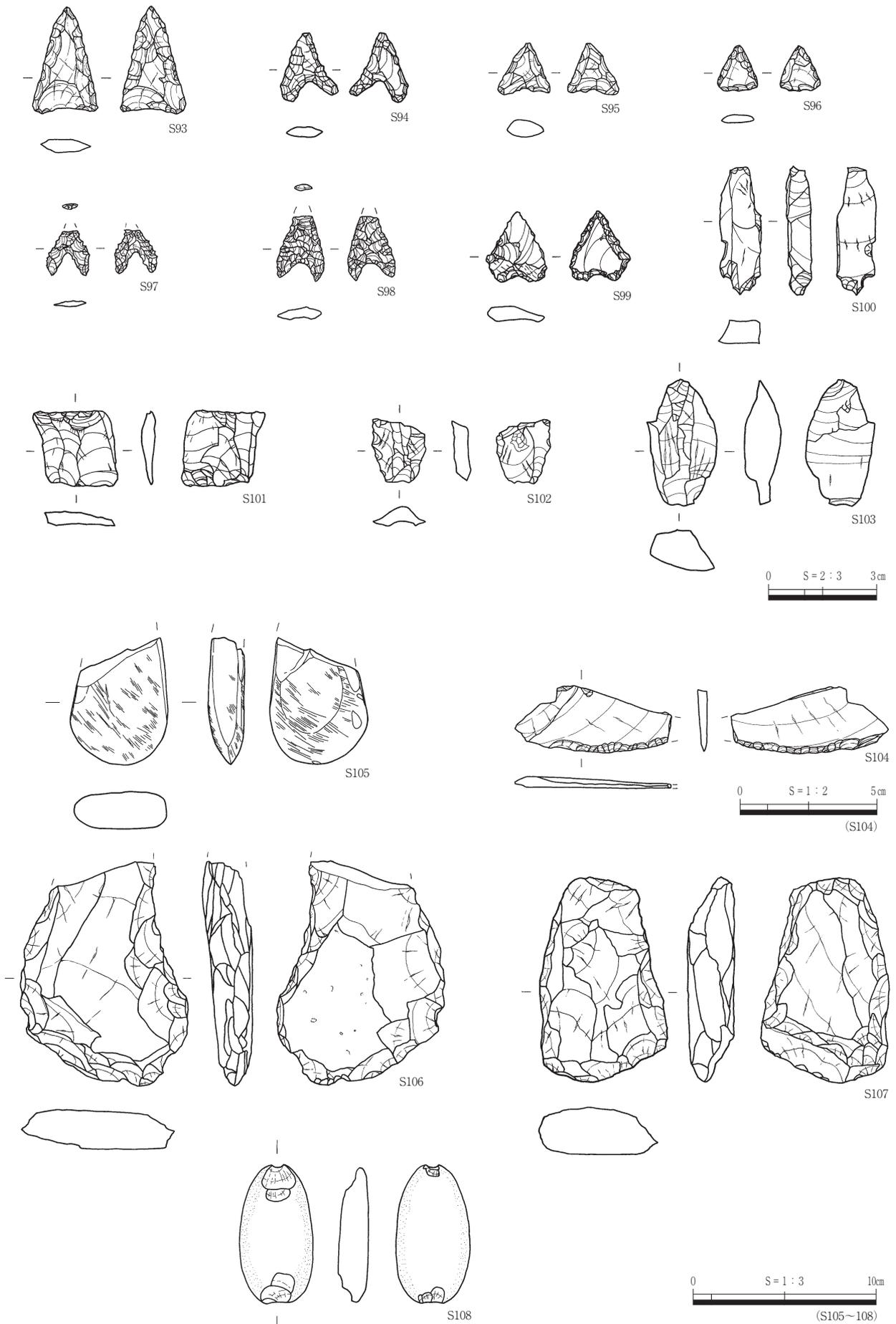
中世の土師質土器も出土しており、341 は土鍋である。八峠編年中世Ⅲ期、13～14世紀ごろのものと考えられる。



第80図 1 - IV層出土遺物(1)



第81圖 1-IV層出土遺物(2)

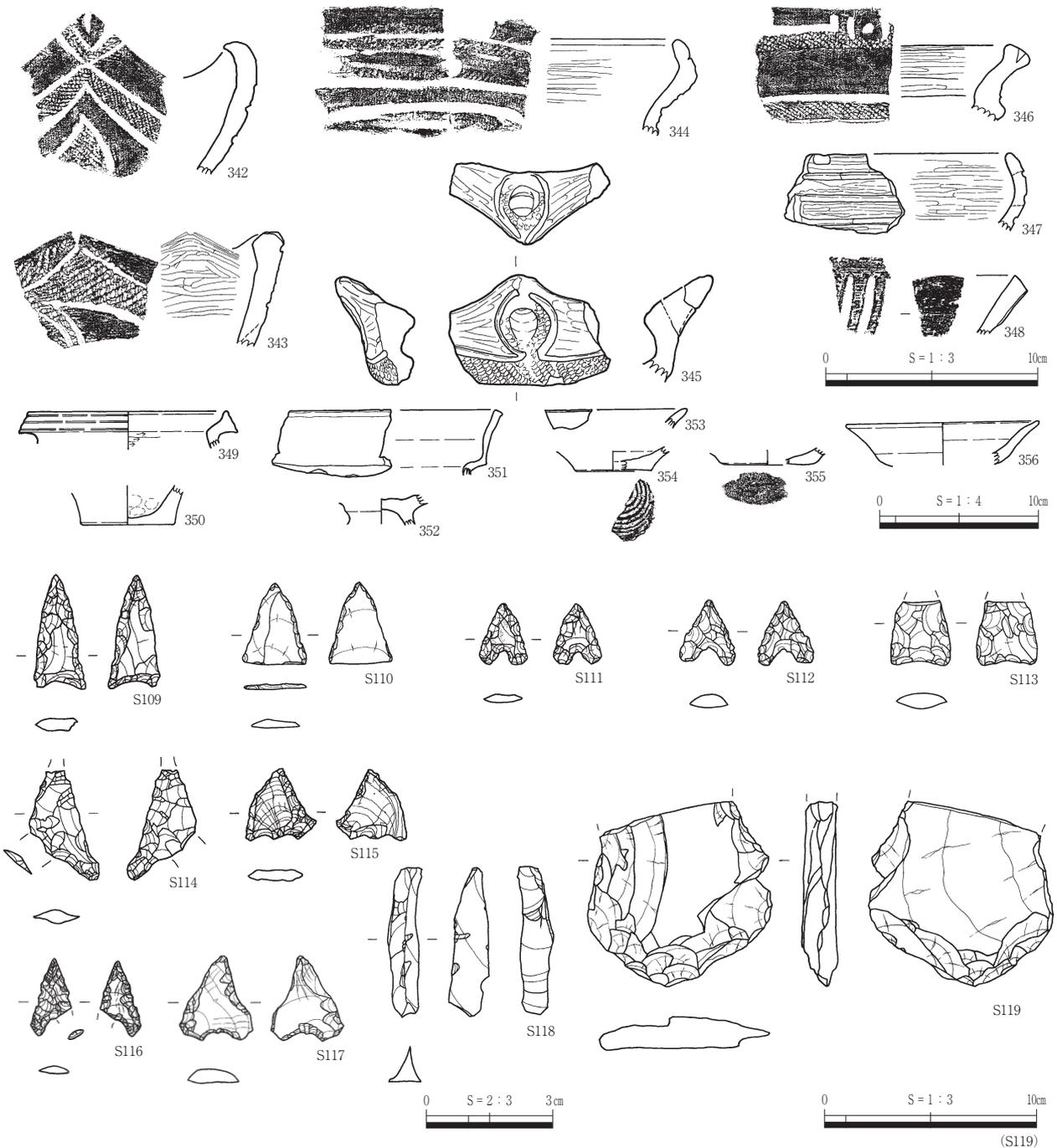


第82図 1-IV層出土遺物(3)

その他、図化できなかったが、奈良時代と考えられる須恵器片もわずかではあるが出土している。

その他、図化した石器では、サヌカイト製石鏃 S93～S96、黒曜石製石鏃 S97、黒曜石製石鏃未成品 S98・99、サヌカイト製楔形石器 S100・101、黒曜石製楔形石器 S102・103、無斑晶安山岩製削器 S104、泥岩製磨製石斧 S105、硬質安山岩製打製石鏃 S106・107、安山岩製打ち欠き石錘 S108 がある。S93 は大型の凹基無茎石鏃で抉りが浅いもの、S94・95 は小型の凹基無茎石鏃、S96 は小型の平基無茎石鏃である。S97 は小型の凹基無茎石鏃である。S105 は小型の磨製石斧刃部片である。

1 - IV層は、出土遺物から中世までに形成された層と考えられる。



第83図 1 - III層出土遺物

1-Ⅲ層出土遺物(第83図、PL. 56・61)

1-Ⅲ層は、1区東側で検出された暗褐色から黒褐色の遺物包含層で、圃場整備前の耕作土と考えられる(第1節参照)。概ね縄文時代から近世にかけての遺物を包含する。土層断面では数層に分層できたが、平面的には識別が困難で、1-Ⅳ層のものと同時に取り上げてしまったものもある。

図化したものは、縄文土器 342～348、弥生土器 349・350、古墳時代前期の土師器 351、古代の土師器 352・353、中世の土師質土器 354・355、近世の陶器 356 である。

縄文土器は、五明田式併行期(中津・福田 K II 式土器様式第3様式古段階)のものでは、有文精製深鉢 342～344 がある。2本沈線による磨消縄文が施され、沈線は変曲点でくいちがうものである。

345～347 は、鳥式(中津・福田 K II 式土器様式第3様式新段階)のもので、345 は有文精製深鉢、346・347 は有文精製浅鉢である。346 は磨消縄文が施されるもの、347 は沈線のみ施文のものである。

348 は、晩期の浅鉢と考えられる。

弥生土器のものでは、清水編年Ⅳ-2・3様式、中期後葉ごろの甕 349、底部 350 がある。

古墳時代のものでは、天神川Ⅰ期の土師器甕 351 がある。

古代のものでは、土師器高坏 352、土師器坏 353 がある。赤色塗彩の痕跡は見られない。

中世のものでは、土師質土器皿 354・355 がある。いずれも、底部には回転糸切り痕が残るもので、八峠編年中世Ⅲ期ごろ、13～14世紀ごろのものと考えられる。

近世のものでは、陶器皿 356 がある。

その他、図化した石器には、サヌカイト製石鏃 S109～S113、黒曜石製石鏃 S 114、黒曜石製石鏃未成品 S115～S117、黒曜石剥片 S 118、硬質安山岩製打製石鏃 S119 がある。S110 は平基無茎石鏃、S109 は細長い凹基無茎石鏃で、挟りが浅いもの、S111～S 113 は小型の凹基無茎石鏃である。S 114 は大型の凹基無茎石鏃、S115～S 117 は、石鏃未成品と考えられるものである。S119 は打製石鏃刃部片である。

1-Ⅲ層は、出土遺物から近世までに形成された層と考えられる。

1-I・1-II層出土遺物(第84図、PL. 56・61)

1-I層は表土・耕作土、1-II層は、調査区全域に亘って検出された造成土である。これらの層には、当遺跡で確認された時期の遺物がかなり包含されていることから、調査地又は近辺の土壌を掘削したものを、造成土として利用したものと考えられる。

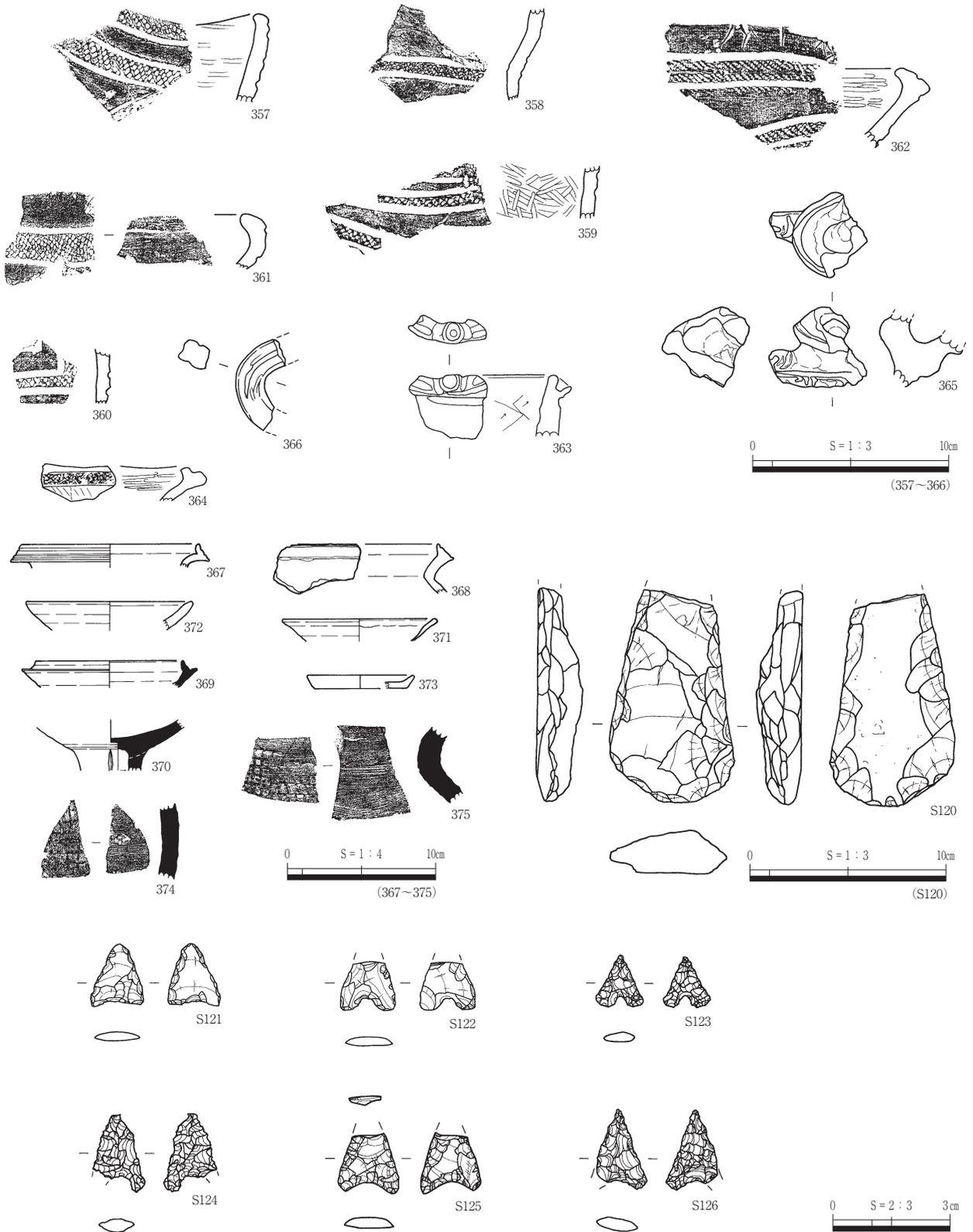
図化したものは、縄文時代後期初頭のものとして、五明田式併行期(中津・福田 K II 式土器様式第3様式古段階)の有文精製深鉢 357～360、有文精製浅鉢 361 がある。2条沈線による磨消縄文が施されるものである。

鳥式併行期(中津・福田 K II 式土器様式第3様式新段階)では、有文精製深鉢 362・363、有文精製浅鉢 364 がある。2から3条沈線に磨消縄文が施されるものである。

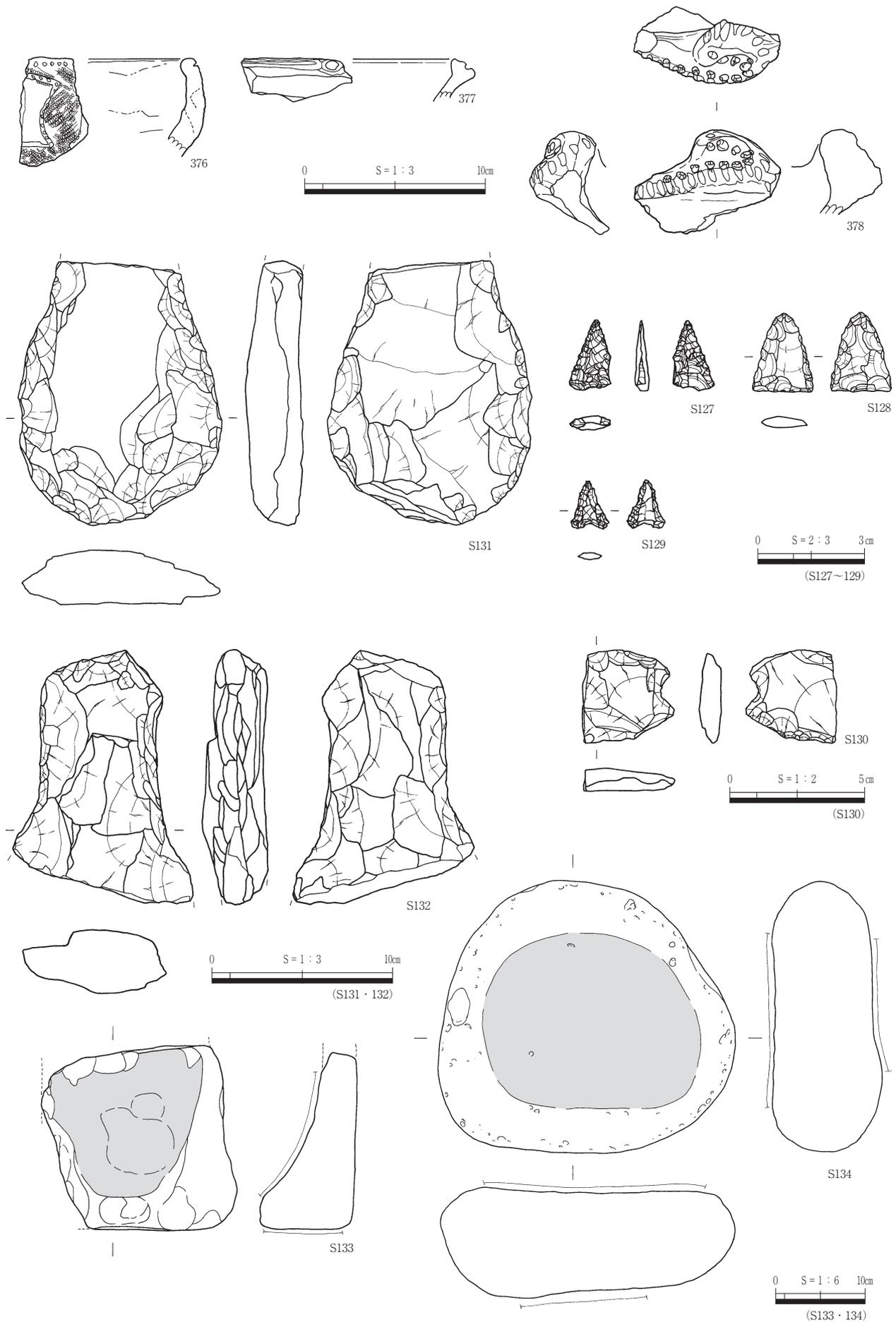
布勢式併行期(中津・福田 K II 式土器様式第4様式)では、有文精製深鉢の突起部 365 がある。

その他、時期は特定できなかったが、把手 366 がある。

弥生時代では、清水編年Ⅳ-2・3様式、中期後葉の甕 367・368 がある。口縁部に凹線が施される甕である。



第84図 1-I・II層出土遺物



第85図 1区遺構外出土遺物

古墳時代では、TK217 併行期の須恵器坏身 369、高坏 370 がある。

古代では、土師器坏 371・372 がある。いずれも奈良時代のもと考えられ、372 には内面赤色塗彩が認められる。

中世では、八峠編年中世Ⅲ期と考えられる、土師質土器小皿 373 の他、勝間田焼と考えられる、外面格子目叩き、内面ハケ目調整が施される甕 374・375 がある。

図化した石器には、小型の打製石鍬 S120、サヌカイト製石鍬 S121・122、黒曜石製石鍬 S123～S125、黒曜石製石鍬未成品 S126 がある。S121 は抉りの浅い凹基無茎石鍬で、S122～S124 は小型の凹基無茎石鍬である。

2 遺構外出土遺物

1区遺構外土出土遺物（第85図、PL.57・58・61）

ここでは、C 5・D 5 グリッドにある風倒木痕と考えられる箇所及び E 4 グリッド攪乱土出土遺物、遺構外出土遺物について触れることとする。

376 は、縄文土器有文精製浅鉢で、五明田式併行期（中津・福田 K II 式土器様式第 3 様式古段階）のもと考えられる。2 条沈線に磨消縄文が施される。377 は、鳥式併行期（中津・福田 K II 式土器様式第 3 様式新段階）のもと考えられる。378 は、布勢式併行期（中津・福田 K II 式土器様式第 4 様式）のもと考えられる。いずれも縄文時代後期初頭から前葉のものである。

図化した石器には、黒曜石製石鍬未成品 S127、サヌカイト製石鍬 S128・129、サヌカイト製打製石包丁 S130、厚手の硬質安山岩製打製石鍬 S131・132、安山岩製石皿 S133・134 である。S128 は大型の平基無茎石鍬、S129 は小型の凹基無茎石鍬である。S130 は打製石包丁片で、抉りが認められる。S131 は基部を欠き、S132 は刃部を欠く。S133・134 ともよく使い込まれた石皿で、表面が大きく湾曲している。いずれも縄文時代に帰属するもと考えられるものである。



文中写真10 平成23年度現地説明会風景(1)



文中写真11 平成23年度現地説明会風景(2)